

なつかしの同期会・同級会だより

◆志太中第三回生 同期会

志太中第三回卒業生昭和五十九年度同期会が、五十九年十一月十一日藤枝市の料亭田毎において行なわれた。

当日は、山田・平井の両先生並びに同窓会長の伊村隆恵氏、兼田勝学校長の御出席を仰ぎ、甲賀・岡本・松永・中野・平松・小林の諸氏が夫人同伴で、他に鈴木・増田・大石・岡田の諸氏、山名・大池・紅林・佐藤・浅井の各夫人が出席されて懐旧談に花を咲かせ、浩然の気を養った。



◆志太中第九回生 同期会

戦後間もない昭和二十三年の暮著しく物資の乏しい時、苦勞して求めた唐黍(トウモロコシ)の酒で、恩師溝口・天野両先生と復員した十名程の友を交えた二十六名が、焼津小土の山中修君の家を借りて、第一回を開催して以来本年で三十六回を数える恒例の志太中九回生の同級会が、焼津地区当番で、去る六月二日、料亭赤塚で行なわれた。

同級生九十八名、うち物故者四



◆志太中 第十一期生の会

学窓を巣立って四十五年、半世紀に近い激動の年月が流れて葉用不老林にも縁遠く、ある友は胡麻塩頭となり、又折目正しい皺にも見舞われて、螢雪時代、眉目秀麗？だった童顔の面影は求むべくもないが、友情の固い絆に支えられた十七名が、西は九州から東は横浜から馳せ参じ、温かい拳骨を頂戴した桑原先生、黄泉に眠る葉隠精神を信条とした土橋先生の奥さん、付添役のお嬢さんを迎えて、中秋の十月五日、潮の香かおる白亜の御前崎観光ホテルに集い、村松社長(十二回生)さんの食べ放題、飲み放題の心尽くしに甘えて、秋の夜長のひととき旧交をあ

十一名、消息不明二名、生存者五十五名で、二十六名出席し、天野、小宮山両先生を迎えて、昔年の恩師、旧友の想い出に花を咲かせ、半世紀の時の流れも一瞬にして戻った思いで時の経つのも忘れて、夕闇の迫る頃、校歌・応援歌を声高らかに唄い、母校の限りない発展と、同級生の今後益々健闘されん事を祈りつつ、次回藤枝南部地区での再会を約して盛會裡に散会した。

(焼津地区当番)

◆志太中第十六回生 物故者法要

志太中第十六回卒業生は去る昭和五十九年八月二十六日、同窓会館二階広間に斎場を設け、同級生関係物故者の鎮魂法要を実施した。若き日に机を並べながら不幸にして早逝された同期生を偲び、御魂安かれと一同冥福を祈った。

法要後、参会者一同「あずさ」にて懇親会を開き旧交をあため、



たため、親睦を深め、さらに翌日はお籠り納めで知られる遠州七不思議の一つ桜ヶ池、大自然の歴史を秘めた浜岡大砂丘の雄大な景観を満喫し、お互いの健康と再会を約して散会。

思えば青雲の志を抱いて机に向かい、時には一つの球を追って校庭を走り回った級友は、卒業時八十三名(転出入生を含め九十四名)すでに四十パーセント近くの三十五名があるいは戦場に散り、あるいは不幸にして病魔に倒れ不帰の人となっており、心安かれと合掌御冥福を祈るものである。

創立六十周年を迎えた母校千原の若き健児が、至誠のこころ芳しく文武両道に輝かしいいさをを立て、高らかな校歌が巷間に流れる日を先輩として願うや切である。

(中西健司)

事務局だより

同窓生の皆様には各卒業期ごと、クラスごとの集まり、さらには部活動単位の会合などを催していただいております。そして、そうした会合の御様子をお知らせさせていただくこの会報に紹介させていただきます。存じます。その際、写真を添えていただければ幸いです。

◆本校創立六十周年記念として「サッカー六十歩の歩み」を出版致しました。A4判、表紙布クロス製本、全ページアート紙使用一五二ページ、ケース入り。本校サッカー史、イヤーブック、日本の中高等学校・高等学校サッカー史上特筆される感動の名場面が残りず収録されております。被写体のユニフォーム一つを比べてみてもスポーツ風俗的に興味をひかれます。グラウンドに騎馬将校が並ぶ写真もあり、オリンピック選手の写真もありません。

定価三〇〇〇円、送料六〇〇円でお届け致します。本校同窓会事務局宛お申し込み下さい。

◆同窓会名簿は定価二五〇〇円送料五〇〇円です。



時の過ぎるのを忘れる一日であった。(佐賀 春)

体験志太中史 ①



グラウンド造りの思い出 森崎 鉄男

現在の藤枝西高校の前に志太郡役所の建物があって、志太中の第一回生は一年の学期をその郡役所の建物のグラウンド予定地に生えながら育ちました。夏休みにいた背丈ばかりの雑草を、汗を流しながら刈りました。二学期に新しい校舎に入ったのですが、二学期からグラウンド造りが始まったのです。

授業は午前中、午後作業でした。グラウンド予定地を一定区画に区切りにながらそこを三〇センチ程の深さに掘り返しました。そして、一番下に岩石、次に礫を敷き、その上に砂利、一番上に土を敷きました。こうして、次々と整地して行ったのでした。作業はグラウンドばかりではなく、二十五メートルプールの穴掘りもしたのです。全生徒がプールの穴を掘り、建設業者の本格工事が終わったところ、土をもどしました。その他、校舎の第一棟を第二棟の間の花壇づくりに使いました。グラウンド、プール、花壇、と作業は毎日、午後、二学期中続いたと思います。

二時半から三時までが休憩時間です。その時には一年生と先生達全員が第一棟の西側にあった井戸のまわりを集まって、まず、手と顔を洗い、汗をぬぐいました。もちろん水も飲みました。水は冷たかったです。そして、何よりも忘れてはいけないことは、この休憩時間には、毎日必ず鉛パン二個ずつが全生徒に与えられたことです。当時では栄区の大貫パン二個で作っていませんでした。井戸のまわりに車座になって全員で鉛パンを食ったのです。その時、錦織三郎校長も生徒の中に座って、親しく話をしながら生徒達と同じように鉛パンを食べたのです。

錦織校長が生徒達に作業を続けさせたのは、その作業を通じて教育をしようという考えがあったからだと思います。休憩が終ると又作業が続けられました。グレイや鉄、運搬用のモッコなどすべての道具が学校に用意されていたので、仕事はなかなか能率的に進みました。大体四時半ごろで終わったと思います。それから、小学校のグラウンドで全員でサッカーをしました。花壇づくりの作業をしました。その時、両側から穴を掘り進めていたので

すが、ある列で、両方の生徒が夢中で掘り進めているうちに対向の生徒の頭に鉄を当ててしまったのです。今だから名前を覚えていたのかもしれませんが、少し離れたところは宮崎作次さんです。少し離れたところはいた私は宮崎君と親しかったのですぐかけ寄りました。その時は何か傷口がまだ白かったようです。すぐにかかえて職員室へ向かったのですが、その途中で血がふき出してきました。その時、先生方が来て宮崎君をつれて行きました。

それから、生徒達全員で、作業中に、このような事故を起こして申しわけなかったと職員室へ謝りにゆこうという事になったのです。何しろ、生徒達が全員で職員室へ押しかけたのですから先生方は驚きました。特に、配属将校の野々垣大尉は何か誤解して大声でどなりましたが、代表者が、事情を説明して記すると、宮崎は医者へつれて行ったところ、もう心配はないので安心しろと言われましました。当時、生徒達の中には、「自分達が成長しつづけるんだ」という実感やよろこびが満ちていたんだと思います。学校側でも、怪我をさせたものを罰するということもなかった。宮崎君も、愚痴めいたことは一言も言いませんでした。新興の意気にあふれていたのです。

そういう私も、三学期、グラウンドの整地の時にローラーに右足を巻きこまれて脱臼したことがありました。三学期は通常授業になりませんでした。私達は、毎日放課後全員で自分達の作ったグラウンドで思うぞんぶんにサッカーをしました。雨が降っても風が吹いても休まずやりました。つらいと思っただけです。

現在は校舎もすっかり建てかえられましたが、私達の頭の中には創立当時の建物や設備がたしかに生き続けています。特に井戸はなつかしいですね。

◆本稿は、森崎氏の談話を事務局が筆録したものです。森崎氏は志太中第一回生、現在は千葉県四街道市在住で、四街道市文化財保護審議会委員をしておられます。今後、志太中各年度の体験志太中史、生きた藤枝東高校史をこうし、た形で続けたいと考えています。